
矛盾犯罪

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

矛盾犯罪

【Nコード】

N0360D

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

『予定犯罪』の呉と柴田の話。ある殺人事件に、柴田は疑問を持った。何かがおかしい。何かが間違っている気がする。犯人は誰なのか。殺人事件が、導いた答えは――

それはいつも突然始まる（前書き）

時間軸は『予定犯罪』の前です。

それはいつも突然始まる

「何か引つ掛かるんですね？ 呉さん」

後ろから声を掛けた後輩を肩越しに見て、呉秀は苦笑した。キィ、と椅子が回転しながら軋む音と重なる。

「まあね」

その表情を確認してから後輩、柴田耕平は呉の横へ立った。

「呉さん…」

柴田は一度視線を資料を持つ手に落とした。言わない方がいいのかもしれない。自分の思い過ごしかもしれない。しかし呉の意見が聞きたかった。

柴田は手に少し力を入れ、何かを決心したように顔を上げた。視線が合つて、呉は微笑み、ゆっくりと次の言葉を待った。柴田は戸惑いの含む声で、しかしはつきりと言った。

「この事件は単純なものなんでしょうか」

パトカーのサイレンが響く中、喪服のような格好をした、今年二十八歳になるがどう見ても二十代前半にしか見えない男が焦点の定まっていない瞳で立っていた。

現在午前四時。全身真っ黒に統一された男は騒ぎの中心、一軒の住宅へと入って行った。

「呉さん！」

前方から走ってくる元気溢れる若い刑事の声で目が覚めた呉は、無表情のまま刑事の方へと歩み寄った。今時珍しい年期の入った木造の家で、歩くことに少し軋む音がする。

「呉さん遅いですよ。…ちゃんと起きてます？」

若い刑事、柴田は眉間に皺を寄せて呉の顔を覗き込んだ。呉の方が背が高かったので自然と上目遣いになってしまう。そんな柴田を見て、

ふと疑問に思った。子犬を思わせる若い刑事は呉が口を開こうとしたのを見て、身構えた。

「耕…君、何歳だ？」

「今年で二十五です。はいっ呉さん、起きてください！」

唐突な質問に答え、柴田は呉の目の前で手を叩いた。起きてるよ…という呉の呟きは叩かれた手の音で消されてしまった。

「まあいいですけど。事件の内容は聞いていますか？」

「確か夫が死んでいるのを妻が見付けた、と」

「そうですよ。まあ百聞は一見にしかず、ここです」

一階の突き当たり。奥の部屋の襖の前で呉と柴田は並んだ。呉はズボンのポケットから手袋を出し、ゆっくりと着けてから襖を開けた。

「これは…」

開けた途端に呉は顔を顰めた。十畳ほどの部屋の中には一角だけ異様な光景が広がっていた。簡素な和風部屋には血まみれの蒲団。そして眠る男。蒲団は首を中心に血で染まっていた。一面紅の中に蒲団から飛び散った羽毛。蒲団のすぐ横には空のガラスコップが倒れていた。空のピルケース。真っ赤な林檎。まるでコップから血が零れて林檎が血を吸ったような、そんな光景だった。

「殺人…か？」

「ええ、そうですね。直接の死因は出血多量みたいです。鑑識待ちです」

三人揃って解決する

「どういうことかな？」

「わからないんです。自分でも何が引つ掛かっているのか……」

言葉が見つからなくて戸惑う柴田の方へと椅子を回転させた。

「第一印象に拘るのはよくないよ。直感は時に必要だからね。今持っている不安は第一印象をどうにかしないと消えないよ」

呉は意地の悪い笑みを浮かべた。柴田はその顔を見て少し怯んだが、年齢より幼く見える顔を顰めた。

「どういう意味ですか？」

「まあ、わかるよ。で、被害者の周辺状況と容疑者は？」

柴田は資料をめくり、よく通る声ではつきりと言う。

「被害者は高田孝治^{たかたこうじ}、四十八歳。大手企業の部長で人望は厚かったようです。しかし最近、よくない噂があったようです。部長の右腕とも言える同僚の永山隆司^{ながやまとかし}が事故で死んだのは、高田がミスの責任を永山に押し付けたからだ、と。今事実を調べているところです。

容疑者は、妻の高田理恵^{たかたりえ}、部下の小山進一^{こやましんいち}、永山の娘、萌^{もえ}です」

「ふーん、そこまで捜査は進んでいるんだね……まあ、とりあえず水野の所に行こうか。さっき連絡があったんだよ」

意味有り気な笑みを浮かべ、スタスタと歩いて行く。柴田は、水野さんですか……と弱く呟いて渋々呉の後についていった。

「呉！ 耕、遅いですよ」

水野医院と書かれた病院の中に入ると、警官二人と話している男が呉達に気付き、呼んだ。

医院長、水野圭は内科・小児科・外科を専門に経営していた。飽くまでも個人医院なので、本人に加え、看護師は六人という少人数だった。それでもなんとかやっていける。そして副業として、司法解剖を指名があったときにだけ行っていた。様々な資格を持つ、呉

の親友。

水野は、診察にくる老若男女にとっても人気があった。愛想は良いし、腕も確かだ。それは呉が保証する。そして容姿も良かった。色素の薄い髪に茶色がかった瞳で、まるで西洋人形のように整った顔立ちで。

「耕、君なら聞いてくれますよね？ 僕の死体記録」

しかし、少し変だった。いや、かなり変だった。呼ばれた柴田は呉の背中に隠れるように移動したが遅かった。左腕をがっしりと掴まれて、診察室へと連れて行かれてしまった。

柴田は水野のお気に入りだった。呉が信頼している部下だったので自然とそうなるだろうと思っていたが、思いの外それ以上に気に入ってしまったのだった。打てば響く玩具、と言えば言葉は悪いがそれに近い。呉にとって柴田は弟のような存在であると共に、水野にとっても弟だった。それを知っているので柴田は水野に逆らえなかった。

「呉さん！」

ドアが閉まる直前まで柴田は呉に助けを呼ぶが、その声を無視し、呉は呆然と立っている警官に声を掛けた。

「ここは俺達にまかせて」

につこりと笑って言う呉に警官達は好意を持ち、はいっと元気よく返事をして去っていった。呉は溜息を吐き、回れ右をして、診察室と書かれた部屋を見た。

そして、ゆつくりと水野と柴田の待つ部屋へと入って行った。

「耕、呉の勘は当たるよ」

警官に対してとは打って変わり、口調を和らげた水野は机の前に置かれた椅子に座り、おもむろに足を組んだ。柴田はというと、恐る恐る患者用の椅子に座り、肯定の意味を込めて頷いた。

「ええ、わかっています。それで、どうだったんですか？」

「そう！ それね、面白かったよ」

楽しそうに満面に笑顔を浮かべ、柴田に近寄る。柴田は立ち上がって逃げようとしたが、上から肩を押さえられた。

「呉さん！」

「頑張れ、耕。話はまとめて後で教えてくれればいいから。俺は外にいるよ」

優しく言い、すぐに部屋を出ていこうとする。柴田は深く溜息を吐き、水野の方へと向き直った。

水野は足の上に肘を寄せ、組んだ手の上に顎を寄せた。ドアが閉まる前に、ぽつりと呉に呟いた。

「呉、この事件は君にしかわからないと思うよ」

二人はわかっている

「呉さん…終わりましたよ」

柴田は明らかに疲れきった顔をして部屋を出てきた。呉は待合室のソファで柴田が座るのを待ち、腰を下ろすのを見届けてから、缶コーヒーを差し出した。

「で、どうだった？ はい、コーヒー」

「あつどうも有難う御座います。えっと…掻い摘みますよ？ まず頸動脈をスパツと切られてますね。それが原因で死亡。出血多量です。犯行時刻は午前二時から半までの三十分。胃の内容物で特定されました。そして死後、数分後に同じ凶器でもう一度首を切り、次に胸部二箇所、腹部に一箇所刺されています。凶器は鋭利な刃物。ちようど果物ナイフのようなものと水野さんは考えているようです。最初の切り傷の方が二回目より深かったようですね。二回目は頸動脈がギリギリ切れた、というところです。刺し傷はどれも半分からいまでしか刺さっていません。しかし血が吹き出るほどです。今回は、一回目の傷からの出血で、二回目以降はあまり血が出なかったみたいですけど」

「水野が喜びそうだね…」

そう言うってから、呉は考え込んだ。前屈みになって、合わせた膝の上に肘をついた。目が真剣で、柴田は声をかけなかった。この状態の呉こそ本当の呉だと、柴田はそう思う。もう呉はこの事件に入り込んでしまった。警部補として、一つの役をこなす名役者としてそして柴田も彼を補佐する一刑事として。

柴田は喉を潤すため、コーヒーに口を付けた。砂糖抜きミルクコーヒー。銘柄も好みのものだった。呉の気遣いが嬉しく、顔が緩んでしまう。

柴田は暫く様子を見てみると、突然呉は立ち上がり、玄関へと向かって歩き出した。

「耕、容疑者は集まっているって言ったね？」

「え、ええ。高田理恵、小山進一、永山萌の三人は今聴取を受けているはずですよ」

手帳を見、はっきりと答える柴田の方へと呉は振り返った。そして、いつの間にかいたのか、診察室のドアの前にいる水野の方へと視線を向けた。

「水野：君は大体の真相がわかってるね？」

「それはお互いさまじゃないのかな？」

呉は不敵に笑う水野の言葉を、肯定しているのか否定しているのかわからない複雑な笑みで答えた。

被害者の妻

「嫌いでした」

高田理恵は第一声にそう言った。質問は、夫のことをどう思っていたか、だった。下を向いて誰とも視線を合わさずはつきり言い切った理恵に、柴田は少しからず疑問を抱いた。隣に座る呉は何とも思わなかったのか、いつも通りの無表情だった。

「嫌いだった？」

言葉を繰り返した呉の方を見、理恵はゆっくりと感情を抑えた声で言った。

「ええ。愛していましたから。いえ、愛しています。だから嫌いでした。仕事が忙しく、家庭を顧みないあの人が。愛人がいるのではないか、と疑ったこともありました」

涙で腫れた目をハンカチで押さえながら理恵は答えた。

「真実を失ってから気付くなんて遅すぎますね」

「いえ、知ることが大切なんですよ。何度も聞いてすみませんが、午前二時のアリバイは？」

「寝ていました。夫も十二時には寝ていましたから。午前三時に様子を見に行きました。いつもの習慣です。夫は病気を持っていて。息が突然止まるという、睡眠時無呼吸症候群です」

無機質な壁に掛かっている時計に視線をやり、確かめるように言った。柴田は一語一句洩らさないように、手帳に書き留めた。

「無呼吸症候群ですか…発見時はどうしましたか？」

「初め、何も変わっていないと思いました。暗闇で月明かりでしかわかりませんでしたから。ただ、何か液体が光ったんです。コップから零れているようだったので、水でも零したのかな、と思いました。確かめる為に電気を点けるとそれは血でした。ショックで何分か動けなくて固まっていました。それからはと気付いて電話をしました。病院の次に警察へ」

死んでいるかどうか、確かめなかったらしい。近付くことができて、見分けがつかなかった。だからまず救急車を呼んだのだ。そのため、現場は一切手がつけられていない状態なので警察は助かっていた。

「何か無くなっている物はありませんでしたか？」

「後から気付いたんですけど…果物ナイフがありませんでした。薬と水の横に林檎を置いておきましたから」

「果物ナイフ…」

柴田は呟き、納得した。現場に足りなかった物、それは果物ナイフだった。水野の言う凶器。しかしそれが引っ掛かっていたモノではないと思った。何か、違う。

「夜、出入りができる場所がありますか？」

「裏口がいつも開いています。でも知っている人は限られています」

「永山萌と小山進一は知っていましたか？」

「…はい」

呉は事務的に聞いた、というようにそれ以上は何も言わなかった。そして柴田にも、それは引っ掛からなかった。不思議と、進入口を知っても感じるものはない。それがまた、柴田の心に残った。

被害者の部下

「もう調べてわかっているのでしょう？ 嫌いでしたよ」

小山進一、三十四歳。永山を慕う部下だった。永山を伝って高田と親しい間柄になっていた。そして何度か永山と一緒に高田宅を訪れていた。しかし、突然の事故で高田に対する信頼を無くしていた。尊敬する永山が退職したのは高田が関わっていると知っていたからだ。付き合いが浅かった為、高田を理解していなかった。もう少し早く親しくなっていたら変わっていたかもしれない。小山も他の社員同様に詳細は知らされていなかった。飽くまでも真実は高田と永山しか知らなかった。

「知っていればあんなこと言わなかったのに……」

「あんなこと？」

ぼつりと洩らした言葉を呉はささず聞き返した。一瞬後悔の色を浮かべた小山だったが、どうせ知られるのだから、と諦めて答えた。

「永山さんを殺したのはあなただって。驚いていましたよ、彼は。そして何も言わなかった。僕はつきり肯定していると……」

「当たらずとも遠からずだったから言えなかったのでしょうか。それはいつ言ったのですか？」

「最後に訪ねた……六日前ですね」

「そうですね。あなたは午前二時、どうしていましたか？」

「家で仕事をしていました。永山さんがいなくなってから会社は大変でしたから。当たり前ですよ、あんなに大切な人を失ったんですから」

小山は声を強めて言った。それは永山を尊敬していたのを証明するようだった。気持ちの昂りを抑えるように煙草を取り出し、吸おうとした。しかしライターが見つからない。

「火、いりますか？」

柴田はさつとライターを取り出した。柴田は煙草を吸わないが、いつもライターは持ち歩いている。非常時に何かと役に立つからと。「有難う御座います。いつもは吸わないんですけどね。気持ちが落ち着かないときなどは吸うんです。でもライターを無くしてしまつて。最後に吸ったのは四日前だったかな？ 仕事が上手くいかなくて」

困ったように笑う小山に柴田は笑みで答えた。小山はすぐに火を付け、ゆっくりと吸った。

被害者の同僚の娘

「憎いですよ」

永山萌。高校一年生。少し顔色が悪かったが、大きい瞳は強かった。彼女が容疑者になったのは、父親が原因だった。父、隆司が高田のミスを押し付けられ、退社。その事実は証明された。現場にあったタンスから事細かに記された手帳が見つかったからだだった。しかし、事故とは直接関係はない。隆司は自らその責任を負った。それを高田は止めた。責任は自分にあるから、と。しかし、隆司は高田は将来会社の為になるからと、断として聞かなかった。退社後、高田はずっと気にしていたようだった。これからどうするつもりなのだろうか、や有難かったなどの言葉で手帳は埋め尽くされていた。事故直前、二人は酒を飲み交わしていた。隆司の就職が決まったからだ。いつもは飲まない隆司はビールを五杯飲み、高田が心配するほど酔っていた。そして別れてから数分後、悲劇は起きた。信号無視をしてしまい、トラックに轢かれ、即死。その三日後、後を追うように母が自殺。事実を知らなかったらしく、何度も高田が殺したんだ、と言っていたようだった。肺を患っていた弟も精神的に弱ってしまい、四日後に他界。この一週間で家族を全員失ってしまったのだった。

「それはそうだろうね。…君は家に行ったことがあるんだっただね」
「はい。お正月に毎年行きました。それ以外ではお祝いとか、特別なことがあったときなど…最近では父のお葬式があった日です。父の遺留品を引き取りに母と。六日前ですね」

確かに四日前、萌は母親と共に高田家を訪れていた。少量の遺留品を取りに。それは理恵が証言してくれた。その時の憔悴しきった母親と、怒りのこもった瞳をした萌の姿が忘れられなかったらしい。
「じゃあ、午前二時のアリバイはあるかな？」

「…寝ていました。この一週間、あまり寝れませんでしたから。十

二時から七時までずっと、寝てました。それに今、家では一人です
から簡単にアリバイなんて見つかりません」

萌は視線を落とし、ペンダントを見た。ゆっくりと触れ、目を閉
じた。それに気付き、呉はゆっくりと尋ねた。まるで世間話をする
ように。

「あれ、そのペンダント…」

「これですか？ これは父が私の誕生日にくれた、オーダーメイド
のペンダントです。私の誕生日は昨日の九月十七日、弟が死んだ日
です。宅配便で来たんです、これ」

小さなダイヤモンドと砂のように散りばめられたサファイヤ。十
六歳になった娘を祝うために作らせた、世界で一つの宝物だった。

「父親からの最後のプレゼント、かな」

無関係者

「高田さんの事件を調べていらつしやる刑事さんですか？」

呉と柴田は、後ろからかかった声に振り返った。振り返った先には、萌と同じ高校の制服を着た女子高生が立っていた。

「君は？」

「私は不知火唯、しんめい ゆい 永山萌さんの友達です。今日は付き添いで来ました」

萌は家族を失って、今親戚の家にいると言っていた。萌としては、付き添いは友達の方が良かったと推測できる。

呉はじつと唯を見た。しっかりしている女子高生のように見えるが、しっかりし過ぎている気がした。まるで大人と話しているようで、呉は唯から視線を外せなかった。

呉の隣で、柴田は何も感じていない様子でにつこりと笑った。

「萌さんの友達なら話してもいいかな。そうだよ、高田さんの事件を担当してる」

「そうですか。名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

柴田が呉に指示を仰ぐと、唯の視線は呉に移った。透明な瞳だった。その瞳は『しっかりしている』印象に不釣合いだった。何が彼女をそうさせているのか、呉は興味を持った。

「俺は呉秀、隣は柴田耕平だよ」

「呉さん、柴田さん。永山さんを助けてください」

「萌さんは犯人じゃないってこと？」

柴田の疑問に唯は辛い顔をした。友達を信じたいから、という理由じゃないように見える。そんな不確定なものではなく、唯は何かを知っているようだ、と、呉は思った。柴田も何かを感じたよう、で、続く言葉を待っていた。

唯は呉に近付き、袖を軽く握った。それは縋っているのではなく、何かを伝えようとしているかのように呉は感じた。遠慮がちに引か

れた袖から、手が離れた。

「このままだったら、永山さんは…。呉さん、わかっているんですよ？ この事件を、悪い結果で終わらせないでください」

「…君は」

「私のことなら、全てが終わったときにお話します。今は答えられないんです。すみません、失礼します」

唯は一礼して走っていった。呉は追いかけなかった。柴田は呉が追いかけないなら動かない。そのまま呉の指示を待った。

「不知火唯、ね。耕、彼女はまた現れるよ。だから、彼女が望む結末を迎えてあげないとね」

呉の穏やかな笑みに、柴田は頷くことで答えた。

全ては揃った

部屋に戻り沈黙する呉に、柴田は小さな声で言った。

「みんな、アリバイはありませんね」

「そうだね…まああつてもなくても変わらないよ。動機は同じ『憎い』。そして二人には『永山隆司』が関わっている。本当に高田が憎かった人はまだいるんじゃないかな…」

独り言のように呟く呉を柴田はじつと見ていた。この人には事件の真相がわかつているんだ、と思う。水野も多分わかつている。もしかしたら、もうパズルはできているのかもしれない。

ピースは集まっている。

「もう一度、現場に行きませんか？」

「いや、行かなくていいよ」

はつきりと言い切った呉は、部屋を出て行こうとした。柴田は慌てて呉の後をいつものようにについて行った。

「高島警部…」

柴田は部屋を出た途端、最悪な組み合わせを目撃してしまった。前方に立ち塞がるのは高島警部。四十代後半で頭髮の薄い、がっちりした刑事だった。

高島はいわゆる自己中心的な人間だった。いつも手柄をとって名を上げようと考えている、欲の塊のような人。そして、そんな警部と呉がそりが合わないの言うまでもない。当人の呉はそんなことはおかまいなしに、無表情で聞いた。

「何か収穫はありましたか？」

「あつたよ。それは藤本くんに聞いてくれ」

少し顔を引き攣らせた高島は、なんとか通常通りに答えた。そして足早に去っていった。

高島を見送った後、柴田と呉は顔を見合わせた。

「何でしょうか？」

「何だろうね。どうせ高田理恵、小山進一、永山萌を犯人にする証拠でも見つかったんだろうけど」

「えっ……」

「まあ聞いてみればわかるけどね」

少し遅れて姿を現した藤本刑事は急いで高島を追った。走っていた藤本は呉を見るなり立ち止まり、お辞儀をした。

「藤本くん、何がみつかったのかな？」

「はい、永山萌のペンダントのサファイヤの欠片と、小山進一のライターです」

犯人はお前だ

呉、柴田、水野が高島に呼ばれた部屋に入ると、そこには高島、藤本、そして容疑者の三人がいた。

呼ばれたのは呉、柴田だけだったが、呉の誘いにより水野もついてきた。それはいつものことなので、高島は気に留めていなかった。「何か用でも？」

パイプ椅子に座る理恵達の真正面に立った高島をチラリと見て、呉は無表情に聞いた。高島は呉達がそれぞれ、理恵、小山、萌の後ろに立ったのを見て、妙に自信を持って答えた。

「犯人がわかったんだよ」

「犯人？」

訝しげに聞いた呉に軽く侮蔑の笑みを返して、理恵を見た。

理恵は突然視線を向けられ、思わず逸らしてしまった。その様子に少しながら嫌悪を抱いた柴田は、キッと高島を睨んだ。柴田の視線を受け流し、高島は淡々と言葉を続ける。

「そう、高田を殺したのは君だ」

何に影響されたのか、探偵気取りで高島が指した先には萌がいた。萌はじつと高島を見つめ、ゆっくりと戸惑いを隠せない様子で何とか口を開く。

「何故私が……」

「君は嘘をついた。最後に来たのは六日前と言っていたが、何故昨日届いたペンダントの欠片が現場にあったんだ？」

「それは……」

目線を下にやり、萌はそのまま口を閉ざした。それはどう見ても高島の言葉を肯定しているように見えた。犯人は萌、そんな考えが場を占める。

静寂。

誰も、何も言えなかった。

「小山さんのライターは何故あつたんですか？」

沈黙を破った柴田の質問に小山はビクツとしたが、藤本が丁寧にそれに答えた。

「会社に忘れていたのを高田さんが持つて帰つて預かつていたようです。持ち主がわからなくてそのままになつていたんですよね？」

いきなり矛先がこつちに向いたので理恵は動揺したが、すぐに首を縦に振り、

「は、はい」

とだけ言つた。

これで萌犯人説は決まつた。

「刺した時にペンダントの欠片が落ちた…ね」

今まで黙つていた呉の呟きを合図に、高島は萌に近づいた。最後の審判を下すように、一歩ずつ。

「そうよ。高田を殺したのは私よ！」

低い、擦れた声で言つた言葉は誰から発せられたのかわからなかつた。高島は立ち止まり、萌を見る。

椅子から立ち上がり、高島の方へ向いた萌ははつきりと語調を強めて言葉を続けた。

「憎かつた！ 家族を殺した高田が！ …でも信じたかつた。おじさんは優しくてそんなことしたなんて思いたくなかつた。あの夜、裏口から入つて話をしようと思つた。二人の時だったら真実を話してくれると思つたから。何故父を身代わりにしたのか、何故父は死んだのか。でも、寝ているおじさん…高田の横にナイフがあつたら！！」

一気に言つた萌は息が上がつていた。泣き出してしまふのではないかと思われるほど悲しそうな顔をした萌。『おじさん』という言葉に、柴田は萌の高田に対する思いを感じた。柴田が近づこうとするのを静止し、呉は近づきながら優しく声を掛けた。

「部屋に入った時、変わったことはなかつたかな？」

呼吸を整えながら、萌は表情を少し和らげ、呉に視線を合わせた。

呉の穏やかな笑みで、我慢していた涙が溢れた。声が涙で不自然に揺らぐ。

「変わったこと…？ 水が零れていたことくらいなら…」

「あと何回刺したか覚えているかな？」

「ええ。首を切った後に三回。家族の分よ」

「首を切ったのは一回、頸動脈を切るため？」

静かに首を縦に振った萌に、安心させるような笑みを浮かべた呉は一語一語正確に言った。

「…そう。君は犯人なんかじゃない」

本当の犯人

「え……」

萌、理恵、小山、柴田、藤本の声が重なった。柴田は呉の方へ振り向くと、あつと声を上げた。気付いた柴田を横目で見て、呉は高島と向かい合い、

「犯人は高田孝治ですよ」

と、良く通る声でさりと云った。

「何を!？」

柴田、水野以外は呉の言葉に戸惑った。意味を理解するのに少し時間がかかり、理恵がポツリと洩らした言葉に皆は納得した。

「自殺……ですか？」

「ええ。水野、そうだったね」

柴田の隣に立って腕を組んでいた水野はにっこり笑ってそうだよ、と言った。

「一回目の傷は二回目より深かったです。これは明らかに違う人物によるものとわかります。二回目は数分後に刺されていました。数分という短い時間に犯人が二人。初め刺した犯人と会う可能性が高かったです。それなのにそんな事実はありません。となるともう一人の犯人は高田自身、となるわけです」

「水野：君は大体の真相がわかつているね？」

「それはお互いさまじやないのかな？」

柴田は納得した。呉が容疑者に会うのが遅かったこと、現場に行かなくていいと言ったこと……それはもうわかつていたからだった。高田孝治が憎かったのは他の誰でもない、高田自身だったのだ。

「後、水が零れていたっていうのは血だったんだよ。理恵さんも言うていたよね？ コップから水が零れているようだった、と。もう高田は死んでいたんだよ。現に返り血を浴びなかっただろう？」

再び頷いた萌を見てから呉は高島を見た。高島は固まっただま、

身動き一つしなかった。

呉は再び視線を萌に合わせ、いつもの感情がこもっていない声で言った。声に含めない優しさを込めたハンカチを差し出しながら。

「萌ちゃん、君は殺していないが死体を傷つけた。その罪は償わなきゃいけない」

緊張の糸が切れたように、ゆっくりとハンカチを受け取り、萌は弱く微笑んだ。その顔にはもう憎しみが残ってはいなかった。あるのはただ後悔だけで。

「…はい。事実には自殺ですけど、やっぱり殺したのは私です。おばさん…ごめんなさい」

萌は理恵と向かい合い、涙で上手く動かない口ではっきりと言った。もう十六歳の、昔の萌に戻っていた。

理恵は優しく萌の肩を抱き、こちらこそ謝らないといけないのよ、と呟き泣いた。

涙は枯れる事がないように思えるほどで。このまま全部洗い流れてくれれば。

柴田は呉と水野に弱い笑みを向けた。

―後日―

「萌さんは理恵さんに引き取られることになったようです。以前から我が子のように思っていたようですから」

水野医院の待合室のソファ―に座った呉に向かって最後の報告をしていた柴田は、可笑しそうに少し口元を緩めた。

「それにしても高島警部のあの顔、忘れられませんよ。固まって最後まで動けなかったんですから。呉さん、全勝ですね。あつ…そういえば呉さん、最初からわかってたんですか？」

報告書に目を通してながら、口だけで笑った呉はどうか？と意味深な言葉だけ呟いた。

「呉は現場を見てすぐにわかったらしいよ」

またいつの間になっていたのか、水野は柴田の後ろに立っていた。もう

慣れてしまった柴田は水野の方へ振り返り、尋ねた。

「えっ……どこですか？」

「羽毛。飛び散っていただろう？ 最初に切ったのは首だったわけだから、蒲団の中央はあまり血を含んでいなかったはずだね。現に水が零れたように見えたんだから。生きている内に刺したなら血が吹き出て蒲団に染み込み、羽毛はあまり飛び散らないはずだね。飛び散ったってことはもう血が噴出すほどではないときに刺した、と」

「正解。耕ちゃん、もう少し頑張ろうね」

呉に子ども扱いされ少し膨れた柴田は、後ろから水野に頭を撫でられ、脱力した。

「でも最後に気付いてえらいえらい」

「水野さん……」

溜め息混じりに呟いた柴田の声を聞き、呉は苦笑した。

休診日の午後、柴田の中ですべてが解決した。

呉の頭の良さ、水野の完璧な検死、揃ってこそ形になることを再確認させられた。そう、この事件は『呉にしかわからない』。

空調の利いた室内での談笑に、ドアの開く音が重なった。

無関係者から知人に

「すみません、呉さんはいらっしゃいますか？」

休診と札は下げているが、急患のために鍵はかけていなかった。

ドアの隙間から覗いた顔に、呉と柴田は同時に声を出した。

「不知火唯……」

「こんにちは。約束を守りにきました」

唯は中に入っているのか迷っているようで、水野は手招きして許可した。

それに唯は優しく笑い、ドアを大きく開けた。唯の背後には男子高校生がいた。

「その子は？」

「私の話をするのには彼が必要ですから。速水零、はやみれい同じ高校の一年生です」

零の会釈に、呉は視線で答えた。柴田は慌ててお辞儀をし、水野は再度手招きした。

三人の雰囲気柔らかかったため、唯と零は顔を見合わせてから靴を脱いでスリッパに履き替えた。

「呉さんの言ったとおりだ……不知火さんが来た」

「事件が良い結果で終わったからです。有難う御座いました」

深々と頭を下げる唯に、呉と柴田は穏やかな笑みを返した。あのまま高島だけがあ的事件を解決していたなら、萌は犯人に仕立て上げられていた。しかし、呉がいたからこそ萌は傷付かずに済んだ。呉がいなくても萌が犯人ではないことは後々わかることだが、無用に傷付ける必要はない。

唯が望んでいた形で事件は終結した。

「高島さん、か。なるほどね」

零の呟きに、唯を除く三人は目を見開いた。高島。それは萌を犯人だと言った刑事だが、あの場には関係者しかいなかった。しかも、

萌がいる前でも『高島』の名前は出していなかった。

零が高島を知る機会はなかったはずだった。

「どうしてその名前を…」

「私は対象者の『未来』を、零は『過去』を見ることができんです。だから、永山さんの未来を見て、彼女を守りたかった」

柴田の思わず漏れた驚きに、唯は再度優しい笑みを浮かべた。その様子は嘘を吐いているように見えない。零の呟きはそれで説明がついた。

唯がこの場で嘘を吐く意味もない。それなら、唯は本当のことを言っている。

呉はそう結論付けた。

「だから、もう真実を知っていた俺に助けを求めたんだね」

「はい。永山さんの未来に呉さんが見えましたから。それに、呉さんの未来に私がいましたから」

「唯の見る『未来』は必ず現実になるわけではないんです。変わる可能性がある。だから、唯は呉さんに逢いに行ったんです」

唯とは違って無表情に淡々と言った零に呉は視線を合わせた。零の瞳は少し灰色がかったいた。

見透かされている、というより嘘が吐けない空気を作る子だ。その瞳を見て、呉は溜息を吐いた。

「もっと良い方法で解決できたとも思えるけどね」

「高島さんが関わっている時点で、今回の終結が一番良い方法だったんです。呉さんだけなら、誰も傷付かずに終わらせられたんですけどね」

呉と柴田と水野は苦笑した。高島が探偵気取りで犯人当てをしなければ、呉だけならば、事件にせずに自殺ということで解決できていた。死体損壊は別にして、『殺人犯』はいなかったのだから。

ふと思いついたかのように、柴田が「あつ」と声を上げた。

「不知火さんは『未来』を見ることで、犯人がわかるんですか？」

「運が良ければ可能です。被害者の未来が見えたら、犯罪は防げま

す。容疑者が次の犯行を予定していた場合もそうですね」

「犯人探しなら、僕が適任だと思いますよ。『過去』が分かりますから。被害者が犯人を見ていたなら、ですけど」

柴田が驚いている隣で、呉は眉を寄せた。それを見て、水野は困ったように笑った。

犯人がわかるということは、犯行の状況を見ることになる。殺される瞬間を目撃する。これから被害に遭うものと、被害に遭った体験をする。

それは、精神的負担が大き過ぎる。

「君たちの力は事件解決の役に立つけど、デメリットが大き過ぎるね」

「被害を少なくするために、必要じゃないですか？」

「連続事件ならお願いしたい。でも、君たちに被害の疑似体験をさせたくないからね」

呉の微笑みに、唯は苦笑いで答えた。

柴田は唯たちの力のデメリットに気付き、慌てて頭を下げた。

「すみません！『未来』と『過去』を見るのは被害の疑似体験だったんですね！」

「気にしないでください。役に立てるなら、と思ってここに来たんですから」

柴田の純粋な謝罪に、唯ははにかんだ。

警察官と医者と超能力者の高校生。変な組み合わせにも係わらず、雰囲気は穏やかだった。

唯が警察を訪れたあの日から。唯の友人が事件の当事者になり、未来を予知したときから。

この日は決定していた。

「遅くなりましたが水野さん、初めまして。不知火唯です。自己紹介から始めませんか？」

唯の提案に、全員が頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360d/>

矛盾犯罪

2010年10月8日15時33分発行